特集

湊（みなと）町酒田の景観を未来へ

●お問い合わせ／市社会教育課文化財係 ☎24-2994

酒田市街地 明和7(1770)年

現在の中心市街地周辺の地図上に、明和7(1770)年当時の町割りを重ねて表示したもの。主要な通り・小路などの位置は現在とほとんど変わらず、数百年を経ていまだ現役であることが分かります。

◆川などの自然の地形は、古絵図をもとに作成したイメージです。

私たちが生活しているこのまちは、誰が作り、いつからそこにあるのでしょうか。

その土地の風土や、人々の生活・経済活動などに基づいて形作られた町並みは景観と呼ばれ、そのまちの歴史や文化を映す鏡です。

酒田にも、市街地や農村地域など、地域ごとに異なる景観が存在し、それぞれの成り立ちには人々の生活が深く関わっています。

今回はその中でも、最上川舟運・北前船交易の中心として栄えた本町、中町などの中心市街地の景観にスポットを当て、その価値を探ります。

知っていますか？

湊町酒田の景観豆知識（トリビア）

中心市街地周辺には多くの史跡や文化財が存在します。山居倉庫や、本間家旧本邸、本間美術館、旧鐙屋、日和山公園の周辺などは特に有名で、市民のみならず多くの観光客が訪れます。

普段何気なく通り過ぎ、眺めている通りや町並みの中にも、数百年前の人々の生活を現代に伝えるものがあることを知っていますか。

中心市街地周辺に残る、歴史・文化のかけらをいくつか紹介します。

▲国指定名勝 本間氏別邸庭園（鶴舞園）

▲旧柳小路マーケット（昭和50年ごろ）

▲旧神明坂（昭和30年）

▲日和山公園からの眺望

▲皇大神社前の階段

柳小路

酒田は風が強く、火災が多かったため、さまざまな防火対策や延焼対策がとられた。柳小路には、その一端が見られる。

柳小路は、宝暦10（1760）年、防火の目的で、利右衛門小路から寺町に至る間に設置された、幅十間三尺（19メートル）の広小路。小路の中央に掘り割り（水路）を作り、浜田～天正寺町～寺町を通して新井田川から水を引き、両側に柳の木を植えた。

しかし、地盤が砂地のため水が浸透してしまい、掘り割りの計画は失敗した。文化10（1813）年、掘り割りを埋め立て、高さ3メートル余りの防火堤が築かれたものの、都市の美観を損なうなどの理由から次第に削られ、柳のみが残ったため、柳小路と言われるようになった。

▲現在の柳小路

笏谷石（しゃくだに）

かつて酒田は、幕府の直轄領であった出羽国の御城米を大阪まで運ぶための、西廻り航路の出発港だった。御城米を大阪で降ろし、北へ戻る際には原則として商品を積んではいけないことになっていたが、空船では船足が軽く危険であったため、能登や越前など日本海の寄港地で「綿積石（わたつみ）」と称される石を積んで船のバランスを取っていた。

笏谷石は船から降ろされた石の中の一種類で、現在の福井県足羽山付近で採掘され、軟らかく加工が容易で色目も美しく、佐渡の赤石に対して青石とも呼ばれた。現在の酒田でも、神社仏閣などの建築物の土台や敷石などとして、当時の面影を見ることができる。

▲旧鐙屋入口付近の敷石にも笏谷石が使われている

神明坂

船場町から日吉町二丁目の皇太神社前へ続く坂。

舟運の発達により北前船が大型化すると、荷上げ場所の中心は、河岸八町（現在の本町付近）から船場町に移り、多くの港湾労働者がそこで働くようになった。北前船から荷揚げされた荷物を問屋に運搬する際、陸丁持（おかちょう）ち（荷物を運ぶ人）の運搬道路として、文化14（1817）年に本間家第4代当主である本間光道が築いた。建設された当時は、敷石や石段には笏谷石が使われており、数度の補修・修復を経て、現在も地域住民によって利用されている。

▲現在の神明坂

町人が作った湊町酒田

元酒田市史編さん委員　須藤 良弘氏

中心市街地に今も残る、湊町酒田の繁栄の証。酒田のまちは誰が作り、守ってきたのでしょうか。酒田のまちの成り立ちについて聞きました。

酒田のまちの成り立ちには、酒田三十六人衆が大きく関わっています。藩に一目置かれる存在だった三十六人衆は、最上川の河口という立地を生かし、舟運・海運を中心とした経済活動に適したまちづくりを行いました。

▲河岸八町の一つ、上袋小路（酒田町奉行所跡前）

川からの荷揚げのために、河岸八町と呼ばれる小路が作られ、周辺地域には船乗りや丁持ち（港湾労働者）が多く住んでいました。河岸八町の北側、東西に延びる本町通りには、三十六人衆をはじめとする商人が、店舗兼住宅を構えました。

現在の中町周辺には、大工町、鍛冶町、内匠町など職人・町人が集まり、まちの北端には寺町が形成されました。

本町・中町周辺は町人が作り守ってきた町ですが、現在の大通りの東側、亀ケ崎・東中の口町・上本町周辺は、亀ケ崎城（現在の酒田東高校周辺）を中心とした城下町です。本町や中町の通りが広いのに対し、城周辺の通りは戦に備えて狭く、複雑に作られていました。亀ケ崎城周辺には、城に勤める武士が中心に住み、内町、片町、給人町と呼ばれた地域には、城で働く人々が住んでいました。

中心市街地付近は、これまで多くの火災に見舞われ、焼失・再建を繰り返したにもかかわらず、町割りは江戸時代から変わっていません。住民の経済活動に則した形で作られたため、変える必要がなかったのではないでしょうか。

かつて河岸八町と呼ばれた地域には、現在も、新井田川から本町通り方向へと続く細い小路が残っています。昔ながらの家屋は失われたかもしれませんが、市内、特に本町・中町など中心市街地周辺には、三十六人衆が活躍した時代を思い起こさせる通りや、神社仏閣などの文化財が点在しています。私は町歩きをしながら、かつての酒田に思いを馳せるのが好きですが、市民の皆さんも、湊町・酒田のいいところを発見し、守り伝えていってほしいと思います。

▲現在の本町通り（旧鐙屋前）

住民の誇りで守る文化的景観

大江町教育委員会 教育文化課
水戸部 泰子氏

歴史や文化を今に伝える景観は、大きな財産であり、保護に取り組んでいる自治体は全国に数多くあります。

県内では、大江町が「最上川の流通・往来および左沢町場の景観」について、国から※重要文化的景観の選定を受け、先進的に取り組んでいます。同町の担当者に景観の保護について聞きました。

※重要文化的景観／文化財保護法において「地域における人々の生活または生業および当該地域の風土により形成された景観地で、国民の生活または生業の理解のため欠くことのできないもの」と規定される文化的景観の内、特に重要で保護の措置が講じられており、国から重要文化的景観として選定されたもの。

大江町楯山公園からの眺望

大江町の景観の重要なキーワードは「町場の景観」ですが、以前から町場に住む人々は、「古くて良いものを守っていこう」という意識を持ち、自主的に景観の保護に取り組んでいました。

そんな中で、県から重要文化的景観の話がありました。選定を受けるためには、文化的景観に関する保存調査と保存計画の策定が必要でした。

調査に出向いて地元の皆さんの話を聞くたびに、自分たちの住んでいる町並みに対する誇りを強く感じました。その誇りを尊重し、景観を次代に残していくことを第一に考え、保存計画を策定しました。

重要文化的景観の選定を受け、うれしかったのは、住民の皆さんがとても喜んでくれたこと。選定を記念するフラッグやパンフレットが作成されるなど、行政が期待していた以上の反応がありました。中心商店街の人は、よく観光客に話し掛けるのですが「話のネタができた」と喜んでいたのも印象的でした。

景観の整備や、活用法などの計画づくりは次の課題です。

選定を受けた喜びを一過性のものとしないために、次世代を担う子どもたちに文化的景観を知ってもらうための取り組みを行っています。具体的には、小学校を対象にした文化的景観に関する絵画コンクールや、高校生を対象にした景観保護に関するワークショップが挙げられます。

大江町の景観にとって、雄大な最上川の流れや町場の風景が大切なのはもちろんですが、本当の主役は、まちに誇りを持って暮らす人々だと思います。かつて最上川には左沢の他にも多くの河岸や港があり、大いに栄えていました。それぞれの地域が、自分たちのまちのいいところを再発見し、誇りを持つことで、最上川流域全体が発展していくことを願います。

▲高校生による文化財調査の様子

景観を未来へ

酒田のまちの歴史や文化を現代に伝える建物などは、姿を消しつつあります。

湊町酒田の景観は、単に懐かしい昔の風景であるだけでなく、私たちの祖先のまちづくりや、生活の様子を物語る貴重な財産です。

普段、何気なく見ている景観を見つめ直し、誇りを持って次世代へと継承していきたいものです。